

今昔物語集天竺部卷五の構成

—— 排列意識と連想意識 ——

前 田 雅 之

今昔物語集天竺部卷五は様々の問題を孕んだ巻である。その問題は、概括すれば、巻五の解釈如何によって今昔物語集全体の組織ひいては世界像そのものが変わってくるという点に集約されよう。これまでの諸先学の巻五研究も主として巻五の解釈が今昔物語集全体とどのように関係するかが論じられてきた。巻五を仏法部の因果応報の巻と捉えて、震旦部、巻九・本朝部、巻十九、二十と関係させ独自の組織論を展開した国東文麿『今昔物語集成立考』(増補版)⁽¹⁾をはじめとして、それを批判的に継承して、仏法王法相依論を背景に巻五王法の巻とした小峯和明『今昔物語集の形成と構造』⁽²⁾や三國仏法史と三國王朝史という著者の構定した今昔物語集の根幹的イデーの下に巻五王法王朝史とした森正人『今昔物語集の生成』⁽³⁾さらに、天竺部を今昔物語集組織のモデルとして巻五を「前仏教の世界」・「非仏教の世界」と把握した出雲路修「今昔物語集編纂考」などといった、研究―就中、編纂・組

織論―の現在を代表する論考はいずれも巻五解釈に触れないものはない。それほど巻五の意味は重いと云わねばならないだろう。編纂者は、嚮に、諸先学の見解に反して、巻五が「付仏前」であることを重視した上で、これが「仏」誕生以前の天竺世界のあり様とその天竺世界が漸次仏法化していき、本生話に至って話を語る現在としての「仏」と結びつき、結果的には、「仏」誕生の必然性を描く巻であるとの見通しを述べた。⁽⁵⁾但し、前稿は大雑把な見通しに過ぎず、論証も不足しているばかりか、連想意識を考慮していなかったのが、本稿は改めて論を立直し、巻五の構成を問うものである。本論に入る前にまず構成の概念を示しておきたい。ここで言う構成とは、ある一定の秩序をもった組織を作るために立てられたイデー(排列意識)と組織を作る過程におけるイデー外の意識(連想意識)とがモザイクのように組み合わされた全体のことである。したがって、構成は作品のイデーを十全に語りうるものではなく、イデー以外のものを確実に自らの内に抱え込んでいる。このように構成を捉えた時、次に、最も完備した構

成Ⅱ組織・編纂論である国東前掲書を相対化する作業が必要になる。

国東前掲書の価値は、今昔物語集の編纂・組織を構成と説話連想とで説明しようとしたところにある。後者は「二話一類形式」と命名され、今日定説となっている。しかし、二話一類形式が完全に機能しているかといえは必ずしもそうとはいえない面もある。例えば、天竺・震旦・本朝各部冒頭に位置する話群は、二話一類形式に拠ったというよりも、歴史叙述の意識で説話を排列したことは既に指摘されている⁽⁶⁾。また、二話一類形式の基本構図とされる「1 2」―「3 4」〔 〕は強い連想契機、―は弱い連想契機、1 2 3 4は説話番号）には疑問を挟む余地が残っている。これらの問題点は、畢竟、説話排列と説話間連想とを固定的な別個の存在と見做し、両者を関係づけなかったことに拠ると思われる。もちろん、そこに意味づけ行為としてたちあらわれ、作品のイデーを見出しうる説話排列に対して、言語遊戲的側面をもつ説話連想は異なる次元にあり、両者を一元的に関係づけることは容易なことではない。国東説以降の編纂・組織論もまた説話連想を括弧に入れて、いわば排除した形で論を形成したといえるのである⁽⁷⁾。だが、両者が不可分の状態で共存しているのが今昔物語集の実態であるという事実を決して忽せにできない。むしろ、共存によって生じたと思われる跛行性こそ作品の正しいあり様を示しているのではなからうか。

二

はじめに、便宜上、巻五の目録標題を記しておく。尚、（ ）内は説話標題にのみ書かれてあるものである。

- 1 僧迦羅五百商人共至羅利国語
- 2 国王狩鹿入山娘被取師子語
- 3 国王為盗人被盜夜光玉語
- 4 一角仙人被負女人従山来王城語
- 5 国王入山狩鹿見鹿母夫人為后語
- 6 般沙羅王五百卯初知父母語
- 7 波羅奈国羅睺大臣擬罰国王語
- 8 大光明王為婆羅門与頭語
- 9 転輪聖王為求法焼身語
- 10 国王為求法以針被螫身語
- 11 五百商人通山餓水語
- 12 五百皇子国王御行皆忽出家語
- 13 三獸行菩薩道鬼焼身語
- 14 師子哀猿子割肉与鷲語
- 15 王宮焼不欺比丘語
- 16 (天竺) 国王好美菓人与美菓語
- 17 (天竺) 国王依鼠護勝合戰語
- 18 身色九色鹿住山出川辺助人語
- 19 (天竺) 亀為人報恩語
- 20 (天竺) 狐自称獸王乘師子死語

- 21 (天竺) 狐借虎威被責発菩提心語
- 22 東域国皇子善生人通阿就頭女語
- 23 舍衛国鼻缺猿供養帝釈語
- 24 龜不信鶴教落地破甲語
- 25 龜為猿被謀語
- 26 (天竺) 林中盲象為母致孝語
- 27 (天竺) 象踏立扶謀人令拔語
- 28 (天竺) 五百商人於大海值摩竭大魚語
- 29 五人切大魚肉食語
- 30 天帝釈夫人舍脂音聞仙人語
- 31 (天竺) 牧牛人入穴不出成石語
- 32 七十余人流遣他国語

卷五は、目録標題と説話標題との間には「天竺」が付されている
 かないないかの違いしかない。それは、物語の捉え方において、構
 想と現実とがほぼ同じことを意味する。つまり、今昔物語集にあ
 っては頗る安定した巻といえる。逆に言えば、ここにある巻の構
 成は今昔物語集の説話排列意識と説話連想意識とのうねりをその
 まま表わしているのである。

三

それでは、手始めに1話く6話を検討したい。1・2話の意味
 については、既述したように、それは前へ(8)世界における天竺
 世界の拡大であった。この両話が対になっているのは、その主題
 からして問題ない。国東説言うところの強い連想契機をもってい

る。ところが、次の3・4話はどうであらうか。国東前掲書は、
 その共通性を「歌舞の美女をもってする国王の謀⁽⁹⁾」とするが、3
 話ではその謀は失敗しているのに対して4話では成功している。

この差異は存外大きい。3話で国王が「夜光玉」を取り戻せたの
 は、作戦を変更し盗人を王権の中に取り込んだからである。しか
 も、盗人が国王の謀を見破ったのは、僧の読む経を聞いたからで
 あって、それが「悪シキ事、善キ事トハ、差別有ル事無、只同ジ
 事也。」という天台本覚論的内容をもつ話末評語に繋がり、一応、
 本話の主題となっている。これに反して、四話は、話末評語「カ
 ク嗚呼ナル聖人コソ有リケレ」が端的に示すように、国王の謀に
 嵌った一角仙人は嘲笑されるのである。即ち、両話は全く対極に
 位置するのであった。但し、「歌舞の美女」の形容をみると、「蔽
 無量ニシテ端嚴美麗ノ女共ニ微妙ノ衣服共ヲ令着メ、花鬘ヲ懸ケ
 其ノ身ヲ飴リ、琴瑟・琵琶等ノ微妙ノ音楽ヲ唱ヘ、様々ノ楽シビ
 ヲ集メテ」(3)「世ニ端嚴美麗ニシテ音美ナル女ヲ撰テ五百人ヲ
 召シテ、微妙ノ衣服ヲ令着メ、栴檀香ヲ塗リ沈水香ヲ浴シテ微妙
 ニ飴レル五百ノ車ニ乗セテ遣シツ」(4)とあるように、類似し
 た表現をもっており、両話の連想契機があることは確かである。
 しかし、それは1・2話と比較するならば、弱い連想契機といっ
 てよい。尚、2話と3話との連想契機は「国王の命令をきいた者
 に国王が半国を与える⁽¹⁰⁾」でよからう。

ところで、4話に続く5・6話は、皇后が五百人の皇子を産ん
 だことで共通しており、両話の連想契機は確かにある。しかし、
 これも、物語の構造は王権の危機克服で共通しつつも、3・4話

同様、仏教説話の5話と全く仏教臭のない6話とではその内容に大きな隔たりがある。筆者は、前稿で7話から始まる本生話の階段として3・6話までは仏法と王法とが交互に現れるとしたが、ここで、5話の目録標題を注目したい。5話の「国王入山狩鹿母夫人爲后語」は、2話の「国王狩鹿入山娘被取弟子語」と標題の前半部分までが極めて類似している事実に気づくのである。類似点は標題だけに留まらない。2話は、王女が師子と関係して男子を産み、男子が父である師子を殺すという展開をもつが、5話も仙人の小便を嘗めた雌鹿が妊娠して、女子を産み、女子が国王の后となって蓮花を産むという展開であり、両話は異類婚によって生まれた主人公が王権と深く関係するという共通項を有するのである。臆測を逞しくすれば、本来、2話から5話に説話排列されるはずであった。こうなると、天竺世界の拡大から(1・2)、王権の正統の後継者の出家→涅槃(5)、王権の正統の後継者の捨身→本生話(7)と続き、まさしく前へ仏教世界の仏教化、換言すれば、へ仏誕生の必然性という構図ははっきりと示されたであろう。しかし、現実はそのようにならなかった。「半国贈与」という連想契機で3話が、「歌舞の女派遣」と「仙人」とで3話と5話との間に4話が入ったのである。恐らく、6話も話柄から考えるに、3・4話と同様の理由で入ったのであろう。⁽¹²⁾かくして、イデーをもたらず説話排列は、説話連想によって常に歪曲されたのである。しかし、翻って考えれば、二つの意識が拮抗する訣ではなく、均衡に釣り合うものでもなく、巻の基本的方針―この場合では前へ仏―世界の天竺―に逆らわない限り、連想をはたかし、

連想を呼んで、いわば、貪欲なまでに構想外的物語を取り込み、不均衡な状態のまま進み続ける方法→跋行性こそ今昔物語集のあり方なのである。とまれ、国東説でいう、強い連想契機と弱い連想契機という連想契機の序列付けは根本的修正を迫られると思われる。

四

上記のような関係は巻五の全般に互ってみられるので、連想契機が不明とされる箇所ポイントを置いて、考察を続ける。

まず、13話と14話である。7話から始まる本生話は、8・9・10・11・12・14・18・21・22・26・29の計十二話を数え、32話からなる巻五の主要部分を支えている。その構成は、7・12話が国王(または皇子、尚11話は主人公を商人としており例外)⁽¹³⁾話、12・26話が動物話と大別される。さて、問題の13・14話は、著名な「月の兎」物語(13)と『百座法談聞書抄』に類話をもつ師子が預かった猿の子を救うために鷲に自分の肉体を割いて与える話(14)とであって、これまで一話の疎漏もなく続いてきた国王等を主人公とする本生話と15・17話にある国家繁栄話を中心とする話群との間に挟まった一見落ち着かない位置にある。加えて、13話と14話とは、動物が自分の肉体を他者に捧げる点で共通しており、連想上の問題点はないが、13話とその前の12話ならびに14話とその直後の15話とは、12話と13話とが()で「比丘または翁が現れて教化する?」とされるものの、結論的には共に連想契機は「不明」とされている。⁽¹⁴⁾なるほど、他の話と比較して連想契機

は確かに見つけにくい。今、試みに推測すると、7話からの本生話の共通要素は主人公を捨身や出家をさせる謀利者がいることである。悪き獸^ニ天帝釈⁽⁷⁾、婆羅門^(8・9)、仙人⁽¹⁰⁾、沙弥⁽¹¹⁾、比丘⁽¹²⁾がそれである。このうち、11話の沙弥は捨身ばかり強調されて話柄を異にするが、それ以外は等しく媒介者をもつ。この要素の共通性を重視すれば、12話と13話との連想契機は国東説でよいと思われる。次に、14話と15話とは、15話が自分の財宝が火事で焼けるのを比丘の進言によって悔まなかった国王の話であり、自分のもの(肉体・財宝)を捨てるという点で連想契機が見出せよう。尚、この自分のものを捨てるというモチーフは上記の本生話の最も重要なものであり、「捨身」はその代表的なものである(捨身をもつ話は、7・8・9・11、本生話ではないが、13話もこれに加えてよい)。かくして、主人公+媒介者という共通要素と捨身を含む自分のものを捨てる行為とが7話から15話までの基本的枠組みということになるだろう。しかし、このように解釈したところで、13・14話がこの位置を占めたかの理由を説明したことにはなっていない。やはり、国王関係話のなかでこの二話だけここにあるのはどう考えても歪つである。

では、13・14話を取り払ってみてはどうか。すると、12話と15話とが繋がることになる。両話は同文的類話である『名大本百因縁集』では、31話と32話で統一している。とはいえ、今昔物語集の依拠資料がそのようであったとは決定できないし、また、仮にそうであっても今昔物語集がそのまま採ったともいえない。したがって、これは参考程度しかないが、両話を凝視すると、比丘

が国王の大事なものの(皇子と財宝)を諦めさせるということと「捨身」ではないことという共通項をもっていたことが判明する。つまり、連結されても不思議ではない関係にあったのである。しかし、何故に両話は引き離されたのであろうか。恐らく、両話の話柄の違いに依るものだろう。13話は、「其ノ時ニ、五百ノ皇子、一度ニ出デテ此ノ比丘ニ会フ。然ル間、五百ノ皇子忽ニ出家シテ戒ヲ受ク。」とあるように、皇子の出家は飽くまで主体的な意志に基づく。これに対して、15話は、火事という不測の事態において、「大王ハ財ヲ貧ボルガ故ニ、三惡趣ニ墮チ給フベキヲ、今日、皆悉ク焼キ失ヒ給ヒツレバ、三惡趣ニ可墮給キ報ノ通レ給ヌル事ノ極テ喜バシキ也。」と諭す比丘に従う国王の態度は受動的といってもよいものであろう。本生話を7話から据えた時、国王や皇子の主体的行動を描いたものでなければ、その訴えるものは小さく、尚且つ、結果的に「仏」の存在までが矮小化されてしまう。したがって、国王関係で話群を統一させようと志向しつつも果たせず、13話を入れ、13話の連想と15話との連想で14話を呼んでしまったのであろう。尚、15話以降、仏法を説く話(15・16)と国家繁栄をモチーフにもつ話(16・17)が連想によって続き、本生話は崩れ、動物話群の事実上のはじまりであり、国家繁栄のモチーフをもつ18話で再び本生話は復活する。かくなる事態は、排列と連想とが織りなすモザイクでしか生まれないだろう。

五

次に、動物話群のなかにあつて動物話ではない22話を取り挙げてみたい。本話については、以前、構造的立場に立つた試論を發表している⁽¹⁵⁾ので、内容には入らない。また、動物話群の意味するものについては後述する。国東前掲書は、21話と22話との連想は認めているけれども、22話と23話とは不明としている⁽¹⁶⁾。私見によれば、22話と23話とは「供養」で共通し、連想契機は認められる。しかし、どうして話はこの場所に入ったのか。こゝも21話と23話とは、話末評語の「世間ニハ、狐ハ虎ノ威ヲ借ト云フ事ハ此レヲ云フトゾ」(21)、「亦、世ノ人ノ鼻缺猿ト云ハ此ノ事ヲ云ゾ」(23)という諺で共通しており、これで繋がつてもおかしくない。問題を解く鍵は、21話の「汝デ、一念ノ菩提心ヲ発セルニ依テ命終シテ後、釈迦仏ノ御世ニ菩薩ト成テ二ノ名ヲ可得シ。一ハ大弁才天ト云ヒ、二ハ堅牢地神ト可云シ」の「大弁才天」にある。大弁才天は、よく吉祥天と混同されたという⁽¹⁷⁾。吉祥天は、22話で「昔ノ阿就頭女ハ今ノ大吉祥菩薩也。」とある。つまり、本生話の結合句が通常なかなか現れない「吉祥天」となったことで動物話を押しのけて本話が入つたのである。加えて、21・22話を貫く無常観と発菩提心も連想を助けているであらう。

こゝで、動物話群についてその特徴と構成上の位置とを述べておく必要があるだろう。まず、動物話群の特徴である。巻五に現れる動物は、天竺部の他卷や震旦、本朝部とその存在形態を異にする。巻五の動物の最大特徴は、動物が主人公であつて、大目人

間と同じように考え話すということである。巻五の動物話群を「動物比喩譚」⁽¹⁸⁾と捉える向きもあるが、それは話末評語からみた把握であつて、物語自体のあり様からは正しくない。なぜなら動物は比喩ではなく言語と思考と感情をもつた自立的存在として、即ち、人間との関係性を通じてではなく、物語に現出するからである。巻五以外で、動物が考え話すのは、諸天・魔王・龍・金翅鳥・鬼・神・天狗・靈といった超自然的存在を除いて、巻一・34、巻四・33の「牛」、巻二・34、巻四・37の「魚」、巻十・11の「鰐」しかない。これらは天竺部と震旦部に集中し、いわば例外的な話である。しかも、これらが語りかける相手は、ほとんど「へ仏」や庄子などの特定の人間であつて巻五にあるような動物同士では決して言語によるコミュニケーションは行われない。つまり、今昔物語集は巻五以外では、原則として動物は人間とは違う畜生と捉えていたことになる。かかる認識は恐らく六道観(地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天上)によるものと思われるが、それでは、巻五ではどうして動物が考え話すことが可能なのか。それは、「へ仏」の前世と「へ仏」生誕以前の世界という位置設定によつて辛うじて可能になったとみるべきである。本生話が如実に示すように、巻五の世界は、「へ仏」の前世たるものが生きている世界である。したがつて、動物といつても、現在の「へ仏」と因縁で繋がっているので、単なる動物ではない。と同時に、前仏国土である巻五の世界は、六道からも自由でありえたのである。

次に、動物話群の排列はどうなっているだろうか。動物話群は、(18・19/26・27)と(20・21・23・24・25)という二つのグルー

プに別れている。前者は、動物と人間との間に交渉があるが、後者はそれがない。また、諺を含む教訓辞をもつのは後者に限られている。このいわばサンドウィッチの如き排列は何によって生まれたのか。それは、説話連想によるとしか考えられないだろう。そこで、注目しなければならないのは、18話と26話との類似性である。助けてやった男が裏切つて九色鹿のことを王に密告する18話は、道に迷つたところを教えてやった男が裏切つて王に香象のことを密告する26話と連結されてしかるべき連想契機をもっている。しかも、18話は同文的類話である『宇治拾遺物語』94にはない、「彼ノ九色鹿ハ今ノ釈迦仏ニ在マス、心ヲ通ゼン鳥ハ阿難也、后ト云ハ今ノ孫陀利也、水ニ溺レタリシ男ハ今ノ提婆達多也」という結合句を付けて、本生話としている。26話も本生話である。これは、本来、國王関係話と同様、動物話群も本生話で統一しようとしたことを示してはいないだろうか。しかし、「亡恩」の連想で、19話と結ばれ、本生話は消えてしまった。そして、物語をモティーフと「狐」の連想で以後、22話を除いて動物だけの物語が続くのである。このうち、21話と22話は本生話となるけれども、22話から話末評語に諺を記すことも始まり、それは、24話まで続く。しかし、25話のように、同文的類話である『名大木百因縁集』下・13では、「此譬即龜者提婆達多猿者釈迦如来」という結合句を削除し本生話でなくしてしまった話もあるけれども、23話の「仏ノ説給フ也ケリ」、24話の「仏ノ守口攝意身莫犯」等ノ文ハ此レヲ説キ給ナルベシ」が端的に示すように、〈仏〉との連結は追求され続けたと言ふべきであらう。

前〈仏〉世界における〈仏〉の前身の行動を國王と動物とによつて、描かんとした今昔物語集の原初的構想は、ここにおいても肥大化し拡散していったが、その結果、他に類をみない人間と動物とに隔たりのない豊潤な物語世界ができあがったのであった。

六

最後に、巻五の末尾に位置する、29・30・31・32話について考えてみた。このうち、連想契機が不明とされるのは、29話と30話である。29話は、流れ着いた大魚を食べた五人の山人が、〈仏〉成道後、最初に教化された五比丘であり、その大魚は〈仏〉であったという本生話であるが、直前の28話とは、「大魚」の連想で繋がっているけれども、直後の30話とは、これといった連想契機をもたないようにみえる。30話は、天帝釈と夫人が戯れているのを見た提婆那延という仙人が通力を失つたという話であつて、確かに連想契機は見出しにくい。しかし、微細にみると、かすかではあるが、一箇所連想契機があることが分かる。それは、「山人」(29)と「仙人」(30)である。「山人」は、今昔物語集中、六話を数える(二・16、四・11、本話、十一・25、十四・9、二十・30)。意味内容は、樵夫など山で働く人というものが多くが、そのなかでも四・11話と十一・25話の用例は注意してよい。前者は、山林修行者を意味しており、直接関係はないけれども、原典の『大唐西域記』では「梵志」としている。梵志とはインドの聖仙・苦行者(苦行)のことである。一方、後者は「丹生明神」のことである。さらに、和歌の世界では、「山人」とは、神に近い人

もしくは仙人を意味していた。用例としては、『古今集』・『拾遺集』・『千載集』はか多くあるが、ここでは、『千載集』巻十六の清輔の歌を挙げておこう。「おなじ龍門寺のこころをよめる 山人のむかしのあとをきてみればむなしきゆかをはらふ谷風」(引用は、『新編 国歌大観』)、この歌は、直前にある能因の歌を承けたもので、能因歌の詞書には「龍門寺にまうでて、仙室にかきつけ侍りける」とある。龍門寺は古来久米仙をはじめとして仙人・神仙の棲むところとして著名であった。さて、本話では、「山人」が具体的に何を意味するか判然としない。しかし、〈仏〉在世時において、拘隣比丘以下五比丘となった点を考慮するならば、物語での機能はともかく、連想契機においては十分「仙人」と結びつく必然性はあったであろう。以上の煩瑣な作業によって、29話と30話との連想契機を認めることができた。尚、巻末の31・32話については、国東前掲書は、「石の穴から出られなくなった牧牛人が、家人にわけを語る。国王が石に化した牧牛人を神霊として尊ぶ。(31)」「土中の室に隠しこめられた大臣の老母が、隣国の難題の答えを大臣に教える。国王が老人を尊ぶ(32)」とするが、話柄の違いから、「人を閉塞空間に閉じ籠める」という点に絞った方が無難であろう。

しかし、これだけではまだ問題はみえてこない。排列意識の側からもう一度光を当てて巻末話の意味を押さえておきたい。32話は、これまで話末の「国ノ政平カニ成リテ民穩カニシテ国ノ内豊也。」を重視した解釈が行われ、巻五を世俗・王法部とする把握の例証とされてきた。しかし、本話の内容が大臣の老母に対する

「孝養」であることは動かない。問題は、本来私的 성격の濃い孝養が国家的危機と結びついたという本話の構造であろう。つまり、誰でも七十歳になると他国に追放されるという法をもった国家を、孝養の結果生みだされた危機克服という事実が変革したという構造である。これによって、孝養は公的なものと認知され奨励され、「老ヲ捨ツト云フ国」から「老ヲ養フ国」に国名まで変更したのであった。孝養というテーマは今昔物語集では仏法世界のものであるから、以上の変容は仏法国家になったことを意味している。故に、その後、国家は繁栄を遂げたのである。但、本話が仏前の巻末話であるという事実を鑑みると、孝養や国名変更は別の意味合をもってくる。巻五でこの二つを共にもつのは2話である。また、国名だけなら1話もある。ここで、1・2話の機能と比較してみると、32話はまさしく1・2話の対極に位置していることが明らかになるだろう。両者は国家的危機を克服する点では基本構造を等しくする。しかし、その方法は著しく異なっている。対立点を明確にするため、2話と対比する。2話の主人公師子ノ子には母には孝養したけれども、その結果、父である師子を殺したのである。よって「父ヲ殺シタル者ヲ賞セバ、我レモ其ノ罪難遁カリナム」という師子ノ子にとっては祖父にあたる国王は悩み、喧嘩両成敗のごとき判断を下さざるをえなかった。即ち、その国家は不孝によって危機を脱出したといつてよからう。そこに登場する「執師子国」とは、追放地であった。(23)これに対して、32話は物語の展開過程が全く逆である。かくして、本話は意識的に巻末に置かれ、前〈仏〉世界の最終的展開を担わされたといつてよからう。

如上、巻五は、構想段階においては、前へ（世界にふさわしい内容と作品世界（具体的には、1—2—5—7—8—9—10—12—15—18—26—32話、—は排列意識によるもの、…は説話間に排列意識が窺われないもの）をもっていたが、説話同士を連結する連想意識によって、図らざる作品世界をもってしまったということができる。しかし、連想意識と排列意識とは、相対立し矛盾する関係にはなかった。というのは、構想に従って排列する行為そのものなにかしらの連想を必要としたからである。²⁶二つの意識は常に相互に関係し合い、巻の基本方針等によって制限されていたけれども、そのあり様は動的であつたと言ふべきであらう。換言すれば、連想意識が構想や排列に支配されない動的なものであるから、説話は次々に連結され、結果として豊かな物語空間を有するに至つたのである。かくして、今昔物語集はその跋行性故にイデーを超えたのみならず、『宇治拾遺物語』のようなそこに意味を読みとることを拒否した連想のみによる説話集とは異なる、骨格をもつた作品を構築することが可能となつたのである。したがって、動的過程を経て形成された巻構成の意味を、その一部を抽出して巻の意味として主題論的に位置づけることは不可能であると言つてよい。ここでの問題に帰れば、巻五を世俗・王法部や王朝史と捉えることは、今昔物語集全体を射程にいれつつ他巻との関係性を過大に評価した結果であることが諒解されよう。しかも、それらは構想レベルの問題を言つたに過ぎないので

ある。今、必要なことは、語れないものを無理に語らず、語れるもののあり様をそのまま語ることであらう。上記の作業はその一例である。但し、今回は作品を紡ぎだす根源である言語の問題に一切触れることができなかった。筆者は一応、三国意識／自国意識・歴史意識という作品の世界観・イデオロギ―を司る意識の他に、編纂（部編纂／巻編纂）意識／構成（排列／連想）意識／言語（物語／評語／表現と語彙）意識という相互関係をもつ、作品形成を司る意識群を拮定しており、すべての問題の根柢に言語を据えて捉える予定であるが、これらについては今後の課題としたい。

注(1) 早稲田大学出版部 78

(2) 笠間書院 85

(3) 和泉書院 86

(4) 『国語国文』 82・10月

(5) 「今昔物語集のへ仏法」とへ王法——その固有性をめぐって——『日本文学』 86・4月

(6) 森前掲書Ⅲ「説話形成と王朝史」「説話形成と本朝仏法史」「説話形成と天竺震旦仏法史」、拙稿「今昔物語集本朝仏法云来史の歴史叙述——三国意識と自国意識——」（『国文学研究』八十二 84）、「今昔物語集本朝仏法史の歴史意識——寺院建立話群をめぐる——」（『日本文学』 85・7月）

(7) 小峯前掲書Ⅳ「天竺部の組織」は二話一類様式と巻主題との揺れを論じているが、両者を対立的に捉えている。

(8) 拙稿 86

(9) 国東前掲書「今昔物語集の構成」

(10) 国東前掲書「今昔物語集全説話の展開表」

(11) 4話の「一角仙人」は、ももとの伝承では、5話同様、仙人と鹿との異類婚によって生まれるが、今昔物語集本文では、誕生の記述がなく、4話と5話の連想契機は山に棲む仙人のもつ験力と王権との関わりしかない。

(12) 6話は全く仏教具がないが、「五百皇子」で5話、「王権の危機とその克服」で7話と繋がる。

(13) 11話は「自分の身を傷つけること」の連想で現れたが、「五百」の連想によって12話の国王関係話を呼び出す機能を結果的に果たした。

(14) 国東前掲書、前掲表

(15) 拙稿「今昔物語集五・22と阿弥陀本地―構造と表現の呼応―」(『古典遺産』32・81)

(16) 国東前掲書、前掲表

(17) 『織田仏教大辞典』参照

(18) 小峯前掲書、前掲論文

(19) 本話が結合句を削ったのは、13話同様、話柄によるもの

であろう。つまり、猿の肝を取ろうとした亀の行為は提婆達多にふさわしいといえるが、亀を騙した猿は捨身を旨とする前生の「仏」にはふさわしくないのである。

(20) 国東前掲書、前掲表

(21) これ以外、『新古今集』以下の勅撰集にはほぼ登場する。また、『八雲御抄』巻三「仙」には、「山人ともいふ。」とある。但し、「人」には、「山人(木こり)也」。又山人をば山人といへり「いふ」。(以上、『日本歌学大系』別巻三による)とあることから、二つの意味が共存していたといふことになる。

(22) 福山俊男『奈良朝寺院の研究』(高桐書院 48)の「龍門寺」の項参照

(23) 国東前掲書、前掲表

(24) 小峯前掲書、前掲論文

(25) 拙稿 86

(26) 拙稿 85は、歴史意識によって排列される説話間にも「連想契機」が認められることを注で指摘している。

寄贈図書(62年3月)

沖繩語の発達(上) 真喜志興雄氏

アクトセント史資料索引五 近松世話物浄瑠璃

胡麻章付語彙索引体言篇 坂本清恵氏

魔界遊行―川端康成の戦後― 森本 穂氏

宮廷歌人 紀貫之

上代歌謡演劇論

日本文学史辞典

文楽資料叢書1

近現代編

村瀬敏夫氏

内藤 磐氏

佐々木雅發氏

国文学資料全集

国立文楽劇場

定本絵入世夢想兵衛蜘蛛物語 山敷和男氏

東京大学文学部国語研究室所蔵 古写本・

古刊本目録 東京大学文学部国語研究室

図書寮叢刊 夫木和歌抄三・四

宮内庁書陵部